

SNW 対話イン愛媛大学対話会 2026（第2回）

事後アンケート分析報告書（詳細版）

結論の要約 有効回答は8件である。基調講演は87.5%、対話内容は100%が「とても満足」または「ある程度満足」と回答した。一方、内容の難しさ、希望テーマを十分に扱えなかったこと、シニアの発言時間が長かったことが改善点として挙げられた。「十分に対話できた」と回答した5人は全員が友人・後輩への参加を勧めたいと回答しており、対話の達成感を高める運営が次の重要課題である。

1. 調査概要

本報告書は、2026年7月29日に回収された「SNW 対話イン愛媛大学対話会 2026（第2回）」の事後アンケート回答を集計・分析したものである。回答ファイルには8件の回答が収録されていた。参加者総数は8名であり、回収率は100%である。

集計は単純集計とグループ別の参考比較を中心とし、複数回答項目は回答者数に対する選択率を示した。標本数が8件と少ないため、グループ差や回答間の関係は探索的な傾向として扱い、統計的な一般化は行わない。

なお、性別は設問中に「報告書には記載しない」と明記されているため、本報告書では集計対象から除外した。また、満足・不満の理由を尋ねる条件付き設問に、満足度そのものを記入した回答などが一部含まれていた。これらは「設問条件と整合しない記入」として区分し、解釈上の留意点とした。

2. 回答者の構成

項目	内訳
対話グループ	グループ1 3人（37.5%）、グループ3 3人（37.5%）、グループ2 2人（25%）
所属学科	地域資源マネジメント学科 2人（25%）、産業イノベーション学科 4人（50%）、産業マネジメント学科 2人（25%）
学年	2年 7人（87.5%）、4年 1人（12.5%）
進路予定	就職 6人（75%）、未定（今後検討予定） 1人（12.5%）、進学 1人（12.5%）

回答者はグループ1が3人、グループ2が2人、グループ3が3人であった。7人が2年生、1人が4年生であり、進路予定は就職が6人、進学が1人、未定が1人であった。産業イノベーション学科の4人は、ものづくりコースと紙産業コースが各2人であった。

3. 基調講演と対話の評価

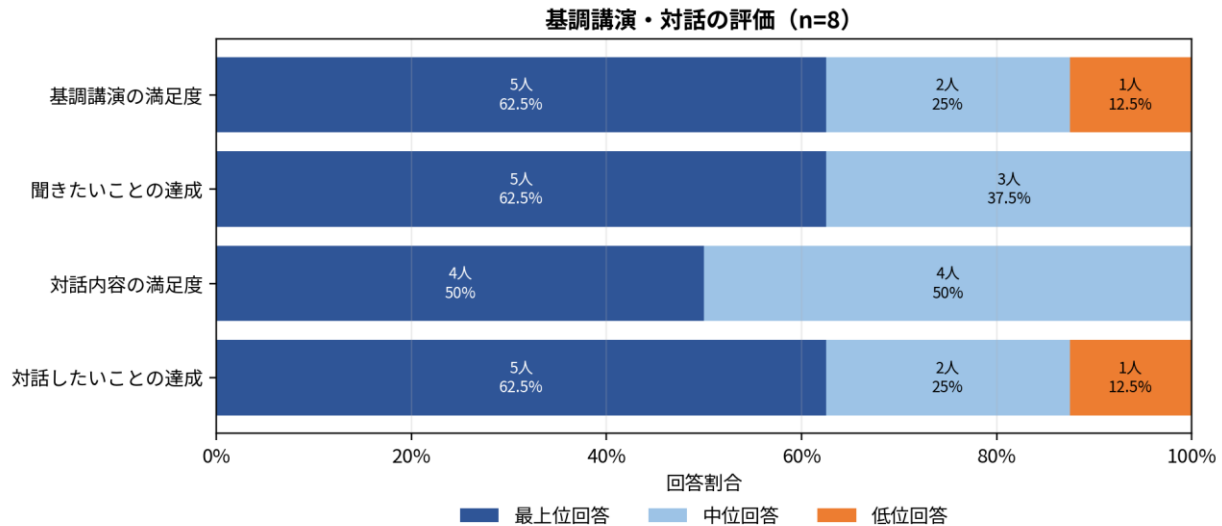


図1 基調講演・対話の評価

最上位回答＝「とても満足」または「十分できた」、中位回答＝「ある程度満足」または「ある程度できた」、低位回答＝「やや不満」または「あまりできなかった」。

評価対象	回答	人数	割合
基調講演の満足度	とても満足	5	62.5%
基調講演の満足度	ある程度満足	2	25%
基調講演の満足度	やや不満	1	12.5%
聞きたいことの達成	十分聞けた	5	62.5%
聞きたいことの達成	ある程度聞けた	3	37.5%
対話内容の満足度	とても満足	4	50%
対話内容の満足度	ある程度満足	4	50%
対話したいことの達成	十分対話できた	5	62.5%
対話したいことの達成	ある程度対話できた	2	25%
対話したいことの達成	あまり対話できなかった	1	12.5%

基調講演は「とても満足」5人と「ある程度満足」2人を合わせた7人（87.5%）が肯定的に評価した。事前に聞きたかったことは全員が「十分」または「ある程度」聞けたと回答した。対話内容は全員が満足と回答した一方、事前に対話したかったことを十分またはある程度対話できたのは7人（87.5%）で、1人は「あまり対話できなかった」と回答した。

3.1 改善理由・追加希望

対象	回答内容	選択数	回答者比
----	------	-----	------

対象	回答内容	選択数	回答者比
基調講演	内容が難しかった	4	50%
基調講演	特になし	2	25%
基調講演	説明が分かりにくかった	1	12.5%
基調講演	設問条件と整合しない記入	1	12.5%
対話	対話内容が難しかった	3	37.5%
対話	希望した内容を対話できなかった	2	25%
対話	特になし	2	25%
対話	シニアの話が長かった	1	12.5%
対話	設問条件と整合しない記入	1	12.5%

最も多い改善指摘は、基調講演の「内容が難しかった」4人（50.0%）と、対話の「内容が難しかった」3人（37.5%）であった。内容の専門性自体は高い満足度と両立しているため、テーマを易しくするだけでなく、用語や前提知識を補う方法が適切と考えられる。

対話では「希望した内容を対話できなかった」が2人、「シニアの話が長かった」が1人であった。事前の質問収集、グループごとの論点設定、発言時間の管理によって改善できる可能性がある。講演以外に聞きたいテーマとしては「原子物理」が1件記載された。

4. 学習成果と対話会の必要性

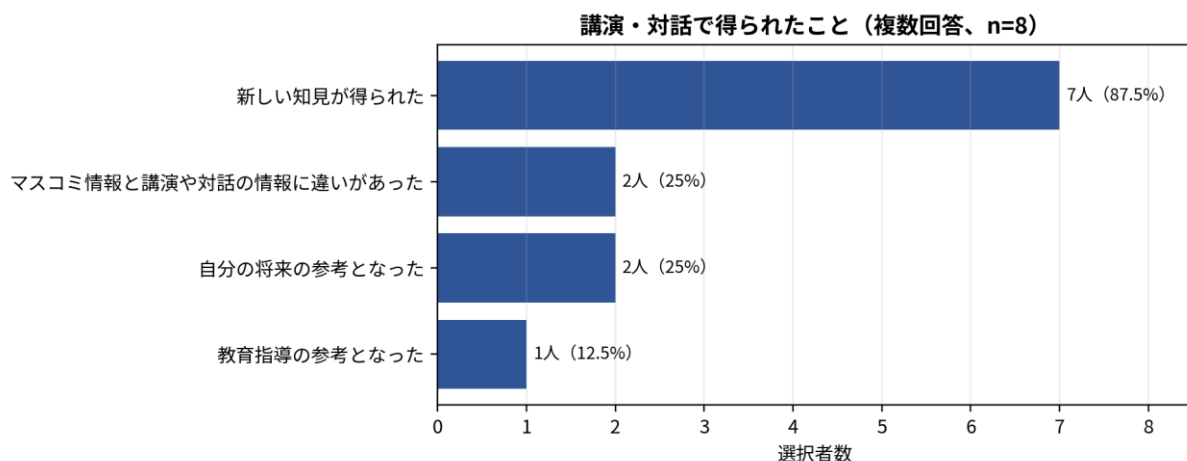


図2 講演・対話で得られたこと

複数回答のため、選択率の合計は100%にならない。

「新しい知見が得られた」は7人（87.5%）で、学習成果として最も明確であった。「マスコミ情報と講演・対話の情報に違いがあった」と「自分の将来の参考となった」は各2人（25.0%）、「教育指導の参考となった」は1人（12.5%）であった。

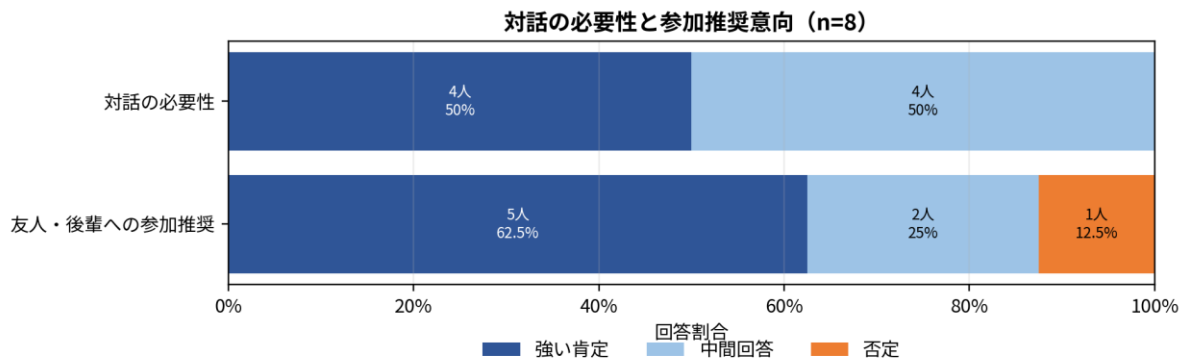


図3 対話の必要性と参加推奨意向

学生とシニアの対話は、4人が「非常に必要」、4人が「やや必要」と回答し、全員が必要性を認識していた。一方、友人・後輩に参加を勧めたいと回答したのは5人（62.5%）で、2人（25.0%）が「どちらともいえない」、1人（12.5%）が「勧めたいとは思わない」であった。必要性の認識は高いが、参加推奨意向には改善余地がある。

4.1 対話の達成度と参加推奨意向の関係

対話の達成度	勧めたい	どちらともいえない	勧めたくない	計
十分対話ができた	5	0	0	5
ある程度対話ができた	0	1	1	2
あまり対話ができなかった	0	1	0	1

重要な示唆 「十分に対話できた」と回答した5人は全員が参加を勧めたいと回答した。これに対し、「ある程度」または「あまり」しか対話できなかった3人には、勧めたいとの回答がなかった。標本数は少ないが、参加推奨意向を高める上で、学生が希望した論点を十分に話せたという実感が重要である。

5. 印象に残ったプログラム

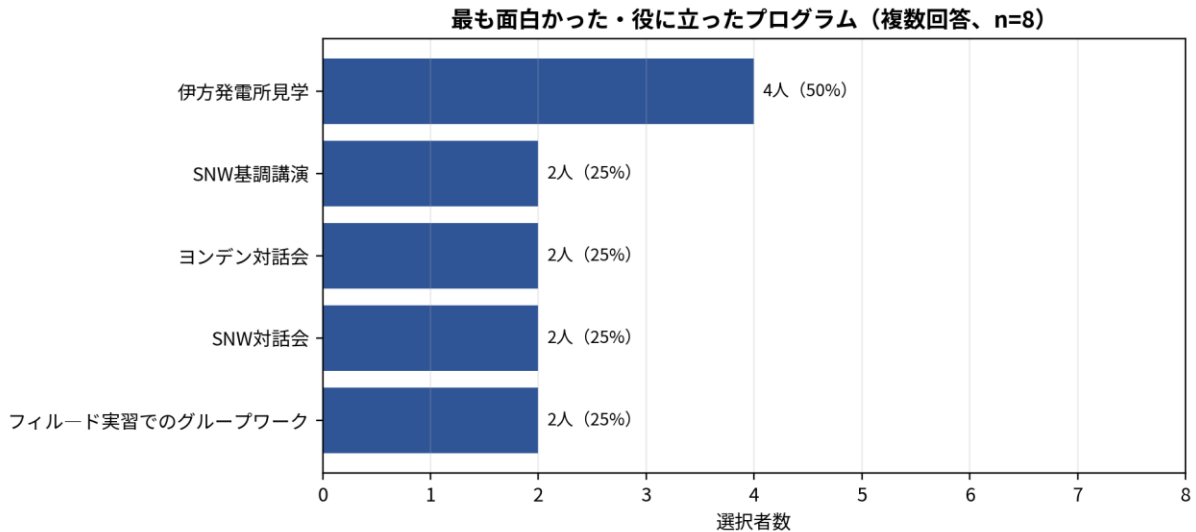


図4 最も面白かった・役に立ったプログラム

複数回答のため、選択率の合計は100%にならない。

伊方発電所見学が4人（50.0%）で最多であった。SNW 基調講演、ヨンデン対話会、SNW 対話会、フィールド実習でのグループワークは各2人（25.0%）であった。現地見学が中心的な学習機会となりつつ、講演・対話・グループワークの各要素にも価値が分散している。

6. 放射線・原子力・再エネに関する認識

放射線・原子力・再エネに関する認識（n=8）

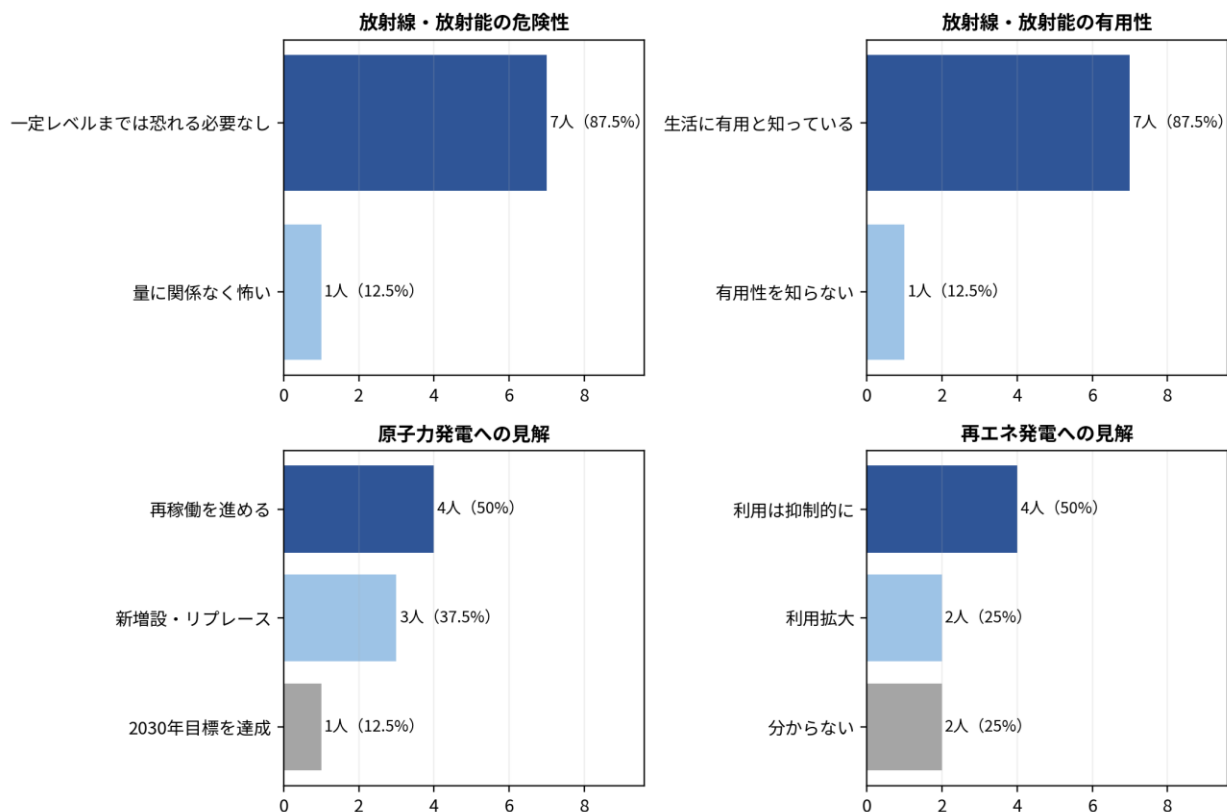


図5 放射線・原子力・再エネに関する認識

放射線・放射能については、7人（87.5%）が「日常的に浴びており、一定のレベルまでは恐れる必要はない」と回答し、同じく7人が医療等での有用性を認識していた。一方、1人は量に関係なく怖いと回答し、1人は生活上の有用性を知らないと回答した。

原子力発電については、全員が必要性を認識し、再稼働、新增設・リプレース、2030年目標の達成のいずれかを支持した。再エネ発電については、天候依存を理由に抑制的な利用を求める回答が4人（50.0%）、利用拡大を求める回答が2人（25.0%）、分からないが2人（25.0%）であり、原子力に比べて評価が分かれた。

7. 温暖化・脱炭素に関する認識

温暖化・脱炭素に関する回答（n=8）

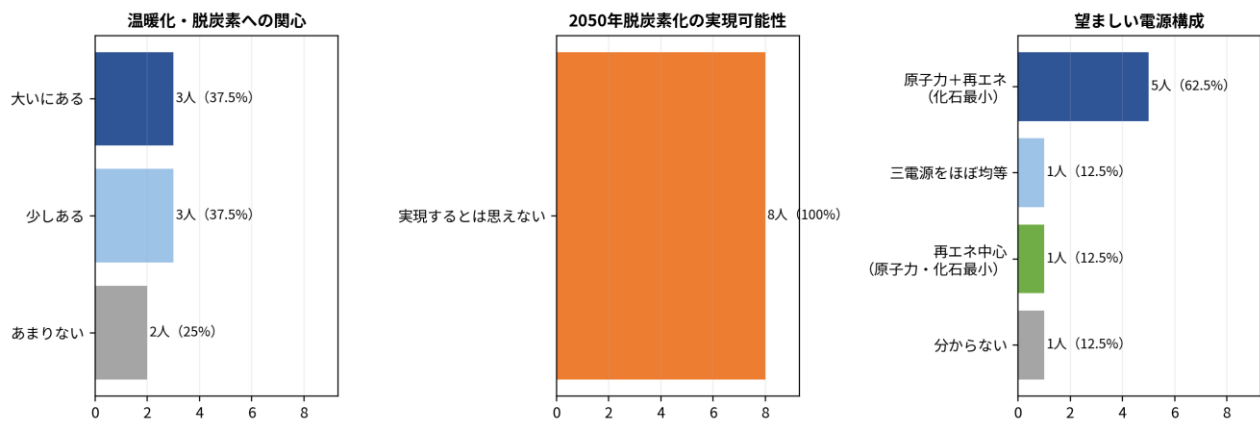


図6 温暖化・脱炭素に関する回答

地球温暖化や脱炭素社会に「大いに」または「少し」関心がある回答者は6人（75.0%）であった。関心分野は「温暖化の影響と対策」「エネルギー資源の確保」「これからの社会変化全般」が各3人で多かった。

日本の2050年脱炭素社会については、8人全員が「実現するとは思えない」と回答した。望ましい電源構成は、「化石燃料発電を最小とし、原子力発電と再エネを組み合わせる」が5人（62.5%）で最多であった。脱炭素目標そのものへの強い懐疑と、原子力と再エネの組合せを現実的な選択とみる傾向が併存している。

8. 地層処分に関する認識

地層処分に関する回答（n=8）

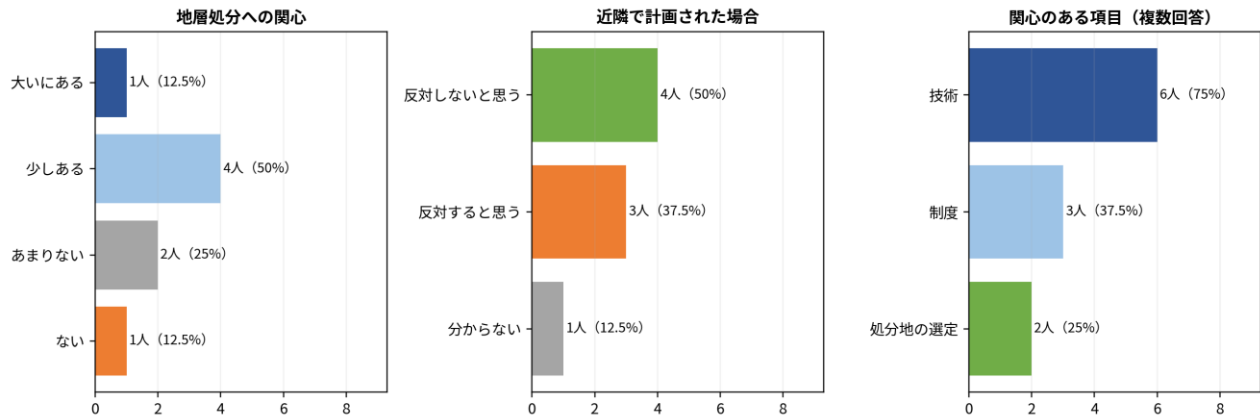


図7 地層処分に関する回答

「関心のある項目」は複数回答。

地層処分への関心は「大いにある」1人と「少しある」4人を合わせた5人（62.5%）であった。自分の住む地域や周辺地域で処分場計画が持ち上がった場合、「反対しないと思う」が4人（50.0%）、「反対すると思う」が3人（37.5%）、「分からない」が1人（12.5%）であり、受容意向は拮抗している。

関心項目は、地質環境調査、処分場設計、安全評価等の「技術」が6人（75.0%）で最も多く、「制度」が3人、「処分地の選定」が2人であった。今後の対話では、技術面を入口としつつ、制度や地域合意形成まで扱う構成が有効と考えられる。

9. グループ別の参考比較

グループ別の上位評価・推奨意向（参考値）

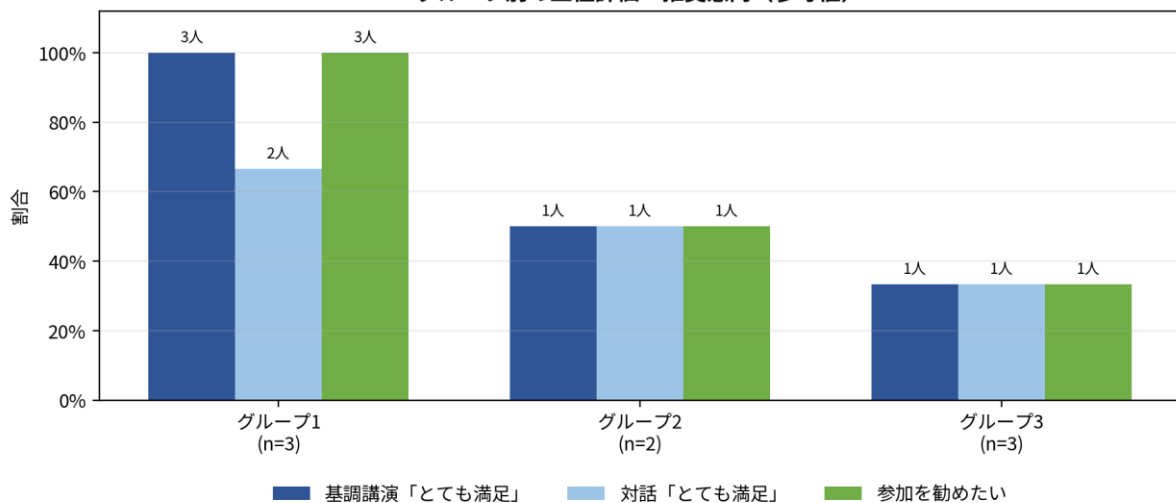


図8 グループ別の上位評価・推奨意向

各グループ2～3人のため、差は参考値として解釈する。

グループ	n	基調講演「とても満足」	対話「とても満足」	参加を勧めたい
グループ1	3	3人 (100%)	2人 (66.7%)	3人 (100%)

グループ	n	基調講演「とても満足」	対話「とても満足」	参加を勧めたい
グループ2	2	1人（50%）	1人（50%）	1人（50%）
グループ3	3	1人（33.3%）	1人（33.3%）	1人（33.3%）

グループ1は3人全員が基調講演を「とても満足」と評価し、全員が参加を勧めたいと回答した。グループ3は評価と推奨意向のばらつきが大きかった。テーマの難易度、ファシリテーション、発言時間配分等が影響した可能性があるが、各群の人数が少ないため因果関係は判断できない。次回はグループごとの進行条件を記録し、比較できるようにすることが望ましい。

10. 総合分析

1. 教育効果は明確である。87.5%が新しい知見を得たと回答し、対話の必要性は全員が認識した。現地見学、講演、対話、グループワークを組み合わせた学習設計が有効に機能している。
2. 高い満足度と「内容が難しい」という指摘が同時に存在する。専門性を下げるより、事前資料、用語解説、要点整理を加えて理解を支えることが適切である。
3. 対話の達成感が参加推奨意向に直結している可能性が高い。希望した論点を話せること、シニアの説明を短く区切ること、学生の発言量を確保することが優先的な改善点である。
4. 原子力の必要性については全員が肯定的で、再エネには慎重な見方が多い。2050年脱炭素化の実現可能性には全員が懐疑的であり、対話会による知識獲得だけでなく、参加者の問題意識や現実認識が反映された結果と考えられる。
5. 地層処分は技術への関心が高い一方、地域での受容意向は分かれた。技術説明だけでなく、制度、地域合意、意思決定の過程を扱う必要がある。

11. 今後のアクション

優先度	アクション	実施内容	狙い
高	事前資料と用語解説の配布	講演・対話の1週間前を目安に、要点1枚、主要用語、参考資料を共有する。	内容の難しさを軽減
高	希望テーマの事前収集	学生が聞きたい・話したい論点を事前に1~2件提出し、グループの議題に反映する。	対話達成度を向上
高	発言時間の管理	シニアの説明を短く区切り、学生の質問・意見の時間を明示的に確保する。	参加推奨意向を向上
中	テーマと専門家のマッチング	学生の発表テーマを事前に共有し、関連分野のシニアを配置する。	回答の具体性を向上
中	グループ進行の標準化	各グループで導入説明、質疑、まとめの時間を統一し、進行メモを残す。	グループ差を検証
中	アンケート設計の修正	条件付き設問の分岐を確認し、該当者以外は回答不要となる設定にする。	不整合回答を削減
中	事前・事後比較の導入	同一設問を対話会前後に実施し、理解や意識の変化を把握する。	教育効果を定量化
低	自由記述の充実	推奨しない・中立の理由を必須または選択式で把握する。	改善要因を特定

付録 設問別集計

割合は有効回答 8 件を分母とした。複数回答項目では合計が 100%を超える。無回答や条件付き設問の不整合回答は、原データに基づき注記した。

設問	回答	人数	割合
基調講演の満足度	とても満足	5	62.5%
基調講演の満足度	ある程度満足	2	25%
基調講演の満足度	やや不満	1	12.5%
事前に聞きたいことを聞けたか	十分聞くことができた	5	62.5%
事前に聞きたいことを聞けたか	ある程度聞くことができた	3	37.5%
対話内容の満足度	ある程度満足	4	50%
対話内容の満足度	とても満足	4	50%
事前に対話したいことを対話できたか	十分対話が出来た	5	62.5%
事前に対話したいことを対話できたか	ある程度対話が出来た	2	25%
事前に対話したいことを対話できたか	あまり対話が出来なかった	1	12.5%
学生とシニアの対話の必要性	ややある	4	50%
学生とシニアの対話の必要性	非常にある	4	50%
友人・後輩への参加推奨意向	薦めたいと思う	5	62.5%
友人・後輩への参加推奨意向	どちらともいえない	2	25%
友人・後輩への参加推奨意向	薦めたいとは思わない	1	12.5%
放射線・放射能の危険性	放射線、放射能は日常的に浴びており、一定のレベルまでは恐れる必要はない	7	87.5%
放射線・放射能の危険性	放射線、放射能は量(レベル)に関係なく怖い	1	12.5%
放射線・放射能の生活上の有用性	医療関係等で利用されており、生活に有用であることは知っている	7	87.5%
放射線・放射能の生活上の有用性	生活に有用であることは知らない	1	12.5%
原子力発電への見解	必要性を認識しており、再稼働を進めるべき	4	50%
原子力発電への見解	必要性を認識しており、将来に向け、新增設、リブレースを進めるべき	3	37.5%
原子力発電への見解	必要性を認識しており、2030 年目標（原子力発電 20～22%）を達成すべき	1	12.5%
再エネ発電への見解	発電が天候に左右されるので、利用は抑制的にすべき	4	50%

設問	回答	人数	割合
再エネ発電への見解	環境にやさしい電源であり、利用拡大を進めるべき	2	25%
再エネ発電への見解	分からない	2	25%
温暖化・脱炭素への関心	大いにある	3	37.5%
温暖化・脱炭素への関心	少しある	3	37.5%
温暖化・脱炭素への関心	あまりない	2	25%
2050年脱炭素化社会の実現可能性	実現するとは思えない	8	100%
脱炭素に向けた電源の在り方	化石燃料発電を最小とし、原子力発電と再エネの組み合わせが望ましい	5	62.5%
脱炭素に向けた電源の在り方	原子力発電と化石燃料発電を最小とし、再エネ中心が望ましい	1	12.5%
脱炭素に向けた電源の在り方	原子力発電、再エネ発電、化石燃料発電をほぼ均等に組み合わせることが望ましい	1	12.5%
脱炭素に向けた電源の在り方	分からない	1	12.5%
地層処分への関心	少しある	4	50%
地層処分への関心	あまりない	2	25%
地層処分への関心	大いにある	1	12.5%
地層処分への関心	ない	1	12.5%
近隣で地層処分場計画が起きた場合	反対しないと思う	4	50%
近隣で地層処分場計画が起きた場合	反対すると思う	3	37.5%
近隣で地層処分場計画が起きた場合	分からない	1	12.5%

付録1 複数回答項目

設問	選択肢	選択者数	回答者比
講演・対話で得られたこと	新しい知見が得られた	7	87.5%
講演・対話で得られたこと	マスコミ情報と講演や対話の情報に違いがあった	2	25%
講演・対話で得られたこと	自分の将来の参考となった	2	25%
講演・対話で得られたこと	教育指導の参考となった	1	12.5%
面白かった・役に立ったプログラム	伊方発電所見学	4	50%
面白かった・役に立ったプログラム	SNW 基調講演	2	25%

設問	選択肢	選択者数	回答者比
面白かった・役に立ったプログラム	ヨンデン対話会	2	25%
面白かった・役に立ったプログラム	SNW 対話会	2	25%
面白かった・役に立ったプログラム	フィールド実習でのグループワーク	2	25%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	温暖化の影響と対策	3	37.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	エネルギー資源の確保	3	37.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	これからの社会変化全般	3	37.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	温暖化メカニズム	1	12.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	主要国の動向	1	12.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	脱炭素化での日本、世界の産業界動向	1	12.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	我国の環境・エネルギー政策全般	1	12.5%
温暖化・脱炭素で関心のある項目	原子力発電や再生可能エネルギーの役割	1	12.5%
地層処分に関心のある項目	技術（地質環境調査、処分場設計、安全評価等）	6	75%
地層処分に関心のある項目	制度（原子力基本法、最終処分法、安全規制等）	3	37.5%
地層処分に関心のある項目	処分地の選定（文献調査、対話、地域振興等）	2	25%

付録2 自由記述

項目	記載内容
講演以外に聞きたいテーマ	原子物理
対話の必要性が低い理由	該当回答・記載なし
参加を勧めたくない理由	記載なし
全体感想・意見 1	フィールド実習ならではの学習が多く、貴重な経験になりました。
全体感想・意見 2	非常に勉強になりました。一生懸命取り組んでよかったです！

自由記述は2件で、いずれもフィールド実習や対話会を「貴重な経験」「非常に勉強になった」と評価する肯定的な内容であった。自由記述の回答率は25.0%であり、改善理由をより把握するには、回答しやすい選択肢と任意の補足欄を組み合わせることが望ましい。